

大学改革の肝となる、学習者中心の大学作り。各大学で、その構築が模索されているが、そもそも「学習者中心」とはどのようなものか。学生の学びについて研究を続けてきた京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上眞一准教授は、「学生の学習時間に注目するべきだ」と指摘する。

学習者中心の大学作りがプロセスは、文字通り学習者がどのようにならなければならないかの過程のことだ。この研究が日本では非常に遅れている。欧米の先進国では、ティーチングからラーニングへ、アウトカムからプロセスへと議論が移行している。ヨーロッパではFDではなく、Education Developmentと呼ぶことも多い。ティーチングと狭く捉えるのではなく、広く教育が変わることを目指している。

「学習者中心」の重要なキーワードの一つに「ラーニングアウトカム」(学習成果)がある。「学生が何を身につけたか」を示すもので、これは中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」で指摘されたものである。実際の評価を考えると、疑問や難しい点もあるが、考え方は今後の学習者中心の大学作りにおいて重要な点と私は考えている。更にラーニングアウトカムを掘り下げると、「ラーニングプロセス」(学習過程)になる。ラーニング

学習時間を測定せよ

学習者中心の大学で必要な講義と演習

教授 京大 溝上眞一

ること、そのために講義に使用されるテキストや文献をしっかりと読んで予習・復習することが求められる。日本のように、講義は聴くだけ、演習では数人がたたくさん喋って、他は黙って聞いて、最後にレポートを出せば合格、というのでは、せほ合格、というのでは、ならぬ。発言しなければ授業をやって学生にどうやって学習させるんだ」と海外の教育者は不思議がっているのが実情だ。

一方、演習やアクティビティは「知識を伝えるだけ」でなく、「知識を身につける」ことが求められる。この二つは、基本的には「知識を通して身につける」といえる。演習やアクティビティは、演習を分ける日本の授業システムは世界的に見て珍しい。しかも「週に一回だけ授業をやって学生にどうやって学習させるんだ」と海外の教育者は不思議がっているのが実情だ。

「知識は一人ひとりの頭にパッと出てくる思いつきや思い込みのことではない。大学の体系的で抽象的、議論のために準備をしなければならない知識のことである。大学生のなかから、テーマから広がる世界観や価値観が重視され、そのテーマなら、これも調べる」と学生を突きつけることも必要だ。GPのおかげで、演習系の授業、プロジェクト学習がずいぶん普及したが、特別な授業が単発で開発されるのではなく、これまでの一般的な講義とどう運動させるかといった課題にも取り組まねばならない。

「学生が何を身につけたか」を示すもので、これは中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」で指摘されたものである。実際の評価を考えると、疑問や難しい点もあるが、考え方は今後の学習者中心の大学作りにおいて重要な点と私は考えている。更にラーニングアウトカムを掘り下げると、「ラーニングプロセス」(学習過程)になる。ラーニング

イブ・ラーニングへの取り組みがどれほど有効なのか。これも問題と感ずる。たとえば北米では、一つの科目で週に三回授業があるものが多く、理想的である。というのも、そのなかで二回を講義、一回を演習にする、座学とアクティビティのバランスが取れるからである。演習は講義を前提とするので、講義内容をしっかり理解す



を主張する教員には、この知識伝達や座学を軽視する者が多いのに感じられる。あるテーマを与えて学生が一生懸命にまとめて発表すること、それだけで満足してはいけない。なぜなら、学生は身近な知識をほぼ習得し、発表していることが多からず、知識・技能・態度を四年間通してどう育てているかという話になって、それを突き詰めるという一つの講義のやり方に通じてくる。学習者中心の大学作りは、参考になる評価指標は授業外での学習時間だ。一度、各大学において学生にアンケートを取ってみてほしい。教育改革に否定的な教員にとっても、授業外学習時間を知ることが、十分なインパクトになる。学習者中心の大学作りは、まず学生の授業外学習時間を延ばすことから始めたいというのが私の考えではない。しかし、日本の大学の授業外学習時間はあまりにも短すぎる。質を議論する状況ではない。授業外学習時間を延ばす方法は色々あるだろう。講義を通して学習するべく、何かしら講義のデザインを変えていく。学生が学習するようになれば、今度はどうすればもっと学習するのである。多くの教員はこの見方がまだできないので、議論や実践が進まない。ラーニングアウトカムを本気で考えたら、知識・技能・態度を四年間通してどう育てているかという話になって、それを突き詰めるという一つの講義のやり方に通じてくる。学習者中心の大学作りは、参考になる評価指標は授業外での学習時間だ。一度、各大学において学生にアンケートを取ってみてほしい。教育改革に否定的な教員にとっても、授業外学習時間を知ることが、十分なインパクトになる。学習者中心の大学作りは、まず学生の授業外学習時間を延ばすことから始めたいというのが私の考えではない。しかし、日本の大学の授業外学習時間はあまりにも短すぎる。質を議論する状況ではない。授業外学習時間を延ばす方法は色々あるだろう。講義を通して学習するべく、何かしら講義のデザインを変えていく。学生が学習するようになれば、今度はどうすればもっと学習するのである。多くの教員はこの見方がまだできないので、議論や実践が進まない。ラーニングアウトカムを本気で考えたら、知識・技能・態度を四年間通してどう育てているかという話になって、それを突き詰めるという一つの講義のやり方に通じてくる。